

大学院特別講義

(医歯学先端研究特論) (生命理工学先端研究特論) (医歯理工学先端研究特論)

1. 講師 三光舎 所長 長嶺 敬彦先生
2. 演題 こころの不思議へのアプローチ ; Approach to Miracle Mind
3. 日時 2020年3月3日 (火) 18時00分~20時00分
4. 場所 10号館2階 歯科心身医学分野 医局

こころの不思議へのアプローチ ; Approach to Miracle Mind

歯科心身症で扱う疾患は、器質的疾患が原因とは考えられない慢性の耐えがたい疼痛を示す。因果関係が説明できない感覚は臨床では多く存在し、こころは不思議である。本講義では、こころの不思議へのアプローチを通して、歯科心身症の病態仮説を考えてみたい。

最初に、われわれのこころが痛みを感じる過程で、基底核領域のドーパミンが重要であることを、恋愛(失恋)の脳回路、味の意図的記名と Schadenfreude (他人の不幸は蜜の味) から考えてみる。同じドーパミン系が関与する現象として、薬理学的効果がない物質が治療効果を示すプラセボ効果について考えてみる。

ところで、歯科心身症では抜歯やインプラントなど歯科治療が誘因となる症例もある。遺伝子が蛋白発現を介して痛み物質を作成するとして、歯科治療がどのようなメカニズムで慢性疼痛の誘因になるか考えてみたい。遺伝的にまったく同じマウスでも腸内細菌が異なれば実験結果が異なる。epigenetics の概念が重要になる。そこで無菌マウス (germ free) の病態を参考に、脳の神経回路の発達やその構成について考えてみる。すなわち adult neurogenesis から歯科心身症へのアプローチの可能性を考えてみる。

最後に、実臨床ではバイタルサインなど日常診療に基づくデータを丁寧に蓄積し、解析することで病態が見える可能性があることを提言する。

自治医大ご出身の長嶺先生は、卒後9年間はへき地医療に従事され、その後は精神科単科病院の内科医として長年ご勤務されています。御経験された内科全般の臨床をベースにした、抗精神病薬の身体副作用のエキスパートとして数百の英語論文と何冊もご著書を出されています。毎回、臨床における先生の緻密な観察ときっちりした文献的裏付けに基づいた鋭い考察に圧倒されています。

今回は、少し歯科心身症と関連づけながら、講演要旨のような数多くの論文トピックスを初学者向けに噛み砕いて頂いて「こころの問題への科学的なアプローチ」のヒントをたくさん教えて頂きました。主にドパミン神経系をターゲットにして、「美味しい記憶」、「他人の不幸は蜜の味」、「楽しい記憶とうつの回復」「自己と痛み」「社会的な痛みと身体的痛み」など解明が進む脳内のネットワークと関連づけながらお話し頂きました。

さらに無菌マウスを例に、遺伝子と同じでも腸内細菌層が異なれば、薬物の反応が違ってくことや抗菌薬への暴露によって精神病罹患のリスクが変わって来るデータなど、遺伝子と環境の相互作用などにも言及されました。



中でも、カプラ（「ターニングポイント」、工作舎、1982）の、クロルプロマジンの「初期のめざましい効果への過信が、向精神薬には様々な副作用があり、症状はコントロールできても奥に潜む病理には無効であると言う事実を覆い隠した」という言葉を引用され、それは決してネガティブなことばかりではなく、「まだ病気をなかつたことにはできないが、部分の調整で楽にすることはできる」というポジティブな意味もあるとのことのお話が印象的でした。今後は各種薬剤の作用点は？、どういう遺伝子に作用するのか？、最終的な回路は？などの疑問を明らかにしていく研究の必要性を示唆されて締めくくられました。あっという間に2時間で、学生さんからの質疑応答も熱心で、とても充実した時間となりました。（文責；豊福）